石見の火山を歩く in 温泉津

実施日：2023 年 3 月 4 日（土）実施
場　所：温泉津町温泉津

1.ゆうゆう館を見学

春の晴れに恵まれた温泉津のまちあるき。これまで幾度も計画しながら 2 回の降雨と 1 回のコロナ休館で実施できなかった企画が、4 回目でようやく実施できました。
ゆうゆう館前に集合して、まずはゆうゆう館を見学。2 階で温泉津の歴史に関わる資料が展示されていて、無料で見学できます。

決して広くないスペースですが、温泉津の発掘調査で出土した「石敢當（いしがんとう）」など貴重な資料があります。石敢當は中国南部から沖縄、鹿児島でみられる魔除けの石塔で、温泉津の港が国際港として繁栄したことを物語ります。

ゆうゆう館の次はすぐ脇の道ばたで「かつての港の跡」を探します。数年前まで手前に建物があった岩の壁に残っているのは、船を係留するための“はなぐり”。岩を掘って綱を通す穴を空けたもので、牛に鼻輪を通すはなぐりからその名前があります。

ゆうゆう館近くのはなぐりがある場所は、江戸時代の浜と町並みの境界部分で舟番所があった場所とのことで、船がつながれていた光景が想像されます。
はなぐりがある岩壁のすぐ横には観音堂があります。正面から見ると建物のようで、引き戸を開けると中は岩窟。岩を掘って作った岩窟に入口部分だけ屋根と壁を作ってあります。

この段階ですでに参加者の驚きは最高潮。実は、はなぐりと観音堂は温泉津の歴史を端的に示す存在で、今回のまちあるきの「メインディッシュ」的な存在でした。冒頭にそれを見てもらうことで、温泉津をイメージして歩いてもらうことを期待しました。

2.愛宕神社となぞの梵鐘

家並みの間に入るとすぐに目にとまる「なぞの梵鐘」の文字。実に気になる表現です。
その梵鐘があるのは愛宕神社で、両側が絶壁になった狭い岩尾根の上にあります。神社な

のに鐘堂があり、梵鐘が下げられているのは神仏混合の名残。それにしても珍しい光景です。
　梵鐘はもともと隠岐郡海士の寺にあったもので、作られたのは室町時代という古いもの。大晦日には除夜の鐘が打たれるということで、神社の除夜の鐘もまた珍しい存在です。

　愛宕神社では社殿の奥にまわり、岩尾根の上の道を歩きます。苔むした道には風情があり、十分に広いために怖さは感じませんが、両側は真下に落ちそうな急崖。崖はコンクリートが打ってあるために確認できませんが、石を切り出したことでそのような急崖になったと思われます。

　温泉津には「凝灰岩」という岩石が分布しており、柔らかく加工しやすいことから石材として多く使われました。町の全体が石切場と言っても過言ではないほどで、石を切って町を整備し、石を切ったことで広がった土地に建物を建てて狭い谷を最大限有効に利用しています。大森の町も同様で、石見銀山のふたつの町は「石切場の町」という一面を持ち合わせているのです。

　岩尾根の道からは、石を削り出して作った階段で下ります。岩盤を削り出した階段も温泉津と大森の特徴です。

　1 段ごとの幅が狭い階段を注意深く下りて、極楽寺に立ち寄ります。本殿の脇に大きな角井戸があり、その枠の細工が見事。長い石の一部を斜めに切り、木組みのように組み合わせてずれない井戸枠にしてあります。このような細工を施した石製品が各所にあるのは、温泉津を中心に凝灰岩に恵まれた大田市ならではです。

　石の細工のすご技に驚きながら、温泉津には一枚岩くり抜きの井戸枠もあることを紹介していると、奥側の墓地にも丸井戸があることに気づきました。それも見てみましょう。
　井戸の蓋は 2 枚の石と鉄製の 3 つのパーツに分かれた面白い形。そして、井戸枠は一枚岩くり抜きです。内側をのぞき込むと、直径 1.2m 程度、長さ 50cm 程度の石の管を重ね合わせていることがわかります。石の町ならではの井戸です。

3.龍御前神社と多田家

　龍御前神社の正面は、かつて廻船問屋として栄え、後に呉服商を営んだ多田家の家屋です。ちょうど改修工事を行っており、外から見学します。母屋は海側が江戸時代、谷奥側が明治時代で、江戸時代の部分は屋根が低く、明治時代の部分は屋根が少し高くなっています。この高さに注目すると、温泉津の家屋が建てられた時代がわかると紹介してくれたのは、多田家の当代、多田房明さん。今回のまちあるきに参加して案内人を買って出てくれました。

多田家の次は龍御前神社の境内に注目。尾道の石工の名が残る鳥居は花崗岩製。石も尾道産と思われます。灯ろうは凝灰岩製と砂岩製が混在。凝灰岩は温泉津の石、砂岩は松江の来待石です。

しばらく石製品を見た後、社殿の裏にまわって奥の院に登ります。奥の院は尾根の中腹に突き出た「龍岩」の下にあり、そこへ登る階段も削り出しです。階段の登り口には、雨水を集めてためる水溜があり、手水鉢として作られたのではないかと思われます。同じような水溜は石見銀山の本体、仙ノ山の本谷から安原谷にも多くあり、そこでは製錬作業用に使われていました。

奥の院は岩にすりつける形で社殿があり、各地で同じ形式の社殿を作った職人の手によるものだそうです。岩自体をまつる古い信仰の形を残しつつ、社殿を作る「折衷」型のようです。

折衷と言えば、温泉津の町並みは、明示から大正期の和洋折衷の建物がいくつも見られることもひとつの特徴で、奥の院からもその建物を見ることができます。

4.町並みを歩く

龍御前神社の奥の院から下りて、町並みを谷奥へ向かって歩きます。

温泉津の町には小さな川が流れていますが、町並みではその存在に気づきません。川の大部分はその上に建物が建って隠されているためです。狭い谷の限られた土地を使うため、石切の跡ばかりでなく川の上までも使っているのです。

川をのぞき見ることができる場所で見ると、建物の土台から川底までがかなり深いことがわかります。温泉津の町は幾度もかさ上げされているのです。道路部分の発掘調査でも、江戸時代前半から幾度も道路をかさ上げしたことがわかっています。

かつては建物があって今は駐車場などの場所を見ると、奥の岩壁が石を切った跡であることがわかります。なかには、岩を仕切り壁の形に残して、岩窟のような部屋を作った痕跡もあります。寺も同様で、直角に掘り込んだ岩に建物や墓が収まっています。

ふたつの大きな寺、西楽寺と恵珙寺の前を過ぎると、温泉街の中心部。温泉津は温泉街として唯一、重要伝統的建造物群保存地区（伝建地区）に指定されており、世界遺産としても

国内唯一の温泉街です。新陳代謝をくり返す温泉街が伝建地区に指定されるのは異例ですが、いくつもの時代が混在しつつ古さを留めている温泉津は唯一無二の存在でしょう。

温泉津はかつて長期逗留する湯治客が多く、その人たちが安く泊まることができる宿も多かったそうです。共同湯のひとつ、元湯の後にある湯光寺は湯治で病気が治った人がお礼参りした場所で、寺の奥の壁には原爆症が治ったことの感謝をローマ字で記したタイルがあります。

5.温泉津やきもの館

港、温泉に加えてやきもの（窯業）も温泉津の特徴です。やきもの館には国内最大級の登り窯が 2 つ並び、かつては周辺にいくつもの登り窯がありました。

温泉津で窯業が盛んに行われた理由は大きく 2 つあります。

ひとつは陶土に適した粘土の産地であることです。やきもの館付近の高さには、都野津層という 300 万～200 万年前頃に形成された地層があり、その中に挟まれる粘土層の粘土は高い温度（約 1300 度）で焼成でき、硬く丈夫な陶器を作ることができます。江戸時代末から昭和まで盛んに生産された製品の代表は瓦とはんど（水がめ）です。これらは松江市玉湯町から宍道町で採れる来待石の粉を釉薬として用いた赤茶色の製品です。また、無色の長石釉薬を使った鉢なども生産されました。

もうひとつは流通手段があったことです。石見銀山の港として栄えた温泉津には、広く各地を巡る船（廻船）が立ち寄り、様々な物資をおろしました。廻船は港で荷を下ろすと同時に、そこから別の荷を積みます。消費地の港だった温泉津から積み出す荷は限られていましたが、窯業が盛んになると陶器が船に積まれて全国に広まっていきました。高温で焼いた瓦は凍結する寒さに強く、北陸から北海道で多く使われ、大量に流通していきました。